

相政は男だ

(十二卷)
三〇五米

帝キネ時代映畫

原作者 高井清太郎
 監督者 矢内政治
 撮影者 鍋本榮一郎
 主演者 明石緑郎
 紹介 第三二二號

地道に作られた佳客傳である。邪氣なく本筋のまゝに進展させたストーリーである。何等の新鮮味もなくかなり多くの人物がそれぞれ相當の存在價值を持つてあることに於て成功して居る。而も加道であり乍ら、頗る觀客の興味を纏んで行く點に此の作品が、類型的使骨物の中にあり乍ら、一種の風格を備へてあることが感じられる。最もラストに至つて人物の總てが決裁されるさ云ふのは少し智慧が足らず、通俗に隨つて居る。榮壽さ云ふ女師匠が相政への戀の手段として、かつて昔彼に救はれた娘ださ云ふ様なことを云ふが、作者は單に是を戀の手段ださ云はせ居るが、ほんとうにさうだつた方が却つてよくはなかつたか。何等の興味がないにも係はらず餘意なく見られたのが嬉しい。明石君に打つてつけの役柄。長田芳川の板垣退助も嬉しい存在。(寫眞版紹介號)——水町青磁——

興行價値——ベストメンパーだし、内容もがつしりと興味本位。少し古いスタイルだが、ご地方の館でも呼物として價値充分。(二月十五日大阪芦田劇場、神戸相生座、京都八千代座封切)